

Topics

2013年5月～6月

◎三浦雄一郎 みうら・ゆういちろう（1932＝昭和7・10・12～ 80歳）
80歳でエベレスト登頂に成功。冒険家・プロスキーヤーとして知られる三浦雄一郎さんが、2013年5月23日、世界最高峰のエベレスト登頂に史上最高齢の80歳で挑戦して成功した。次男で医博の三浦豪太さんが今回もつきそった。70歳、75歳に続いて5年後の80歳での快挙。

・8848mでマスクをはずしていた理由。証拠のため山頂で素顔を出す。無線で電話をする。感激して景色を眺めていて空気を吸うのを忘れていた。下りの体力に影響。

・途中で死を意識。8700mちょっと下で二日まえに亡くなった人の姿をみて。

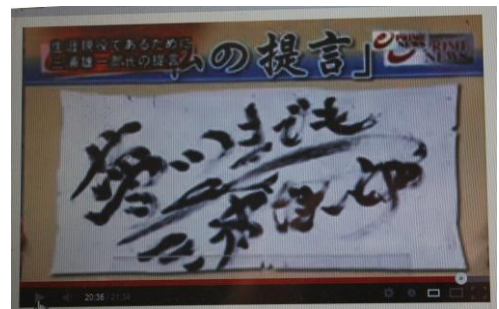
・日ごろの訓練。足首に5キロ、背中に15～20キロの負荷をかけて外出。空身で散歩はもったいない。新宿や銀座を歩くときも、どこでもヒマラヤの景色を楽しめる。

・主治医のひとり白澤卓二順天堂大教授（加齢制御医学）のコメント。わが国は100歳以上が5万人になったが8割がねたきり。100歳以上で元気な人は「前向きで楽天的な性格」という特徴をもっている。高齢になっても特有の病気や体力の衰えを克服するのが「アンチエイジング」。（三大要素は「食事」「運動」「生きがい」）。三浦さんの父敬三さんは100歳を越えても活躍されていた。三浦さんも心臓病を克服し、アンチエイジング活動に努めて60歳ぐらいの体力に。「低酸素トレーニング」（事務所に6000m高度までの「低酸素ルーム」がある）の効果によって血液中のHO1（ヘムオキシゲナーゼ）が5倍の濃度になっている。

・加齢と死について。「チャレンジし行動する」「運動して体力がつけば前向きになる」「ワクワク、ドキドキする気持ちを失わない」「さっそうとして見せる見栄も必要」という。「好きなことに夢中になって、笑って死ぬる」こと。

・85歳までの次の目標。エベレストはない。が、8200m級のチョーオユウ（世界第6位の高峰）から豪太といっしょにスキーで滑ること。

・生涯現役であるための提言。「夢いつまでも」



BSフジ・プライムニュース（6・7）

○ネパール人登山家ミン・バハドゥール・シェルチャンさん（81）は、2008年5月に76歳で登頂して三浦さんの年齢記録を破った。今回も81歳での登頂に挑戦したが、断念して5月28日に下山した。

◎木村次郎右衛門 きむら・じろうえもん（1897＝明治30・4・19～2013＝平成25・6・12）

世界一の長寿者が死去。世界一の長寿者で、男性では史上最長記録として昨年12月に

ギネス社に認定された木村次郎右衛門さんは、肺炎で京丹後市の病院に入院、6月12日、老衰のため死去した。116歳54日だった。京都府京丹後市丹後町在住。地元の尋常高等小学校を卒業後、1914年から丹後町などの郵便局につとめ、1962年に退職後は90歳まで農業。ギネス認定の折りには、「サンキュー・ベリーマッチ。ユウアー・ベリーカインドマン」とお礼をのべていた。子ども7人、孫14人、ひ孫25人、やしゃご（玄孫）9人。これにより、世界最長寿者は日本女性の大川ミサヲさん（1898＝明治31・3・5～115歳）に。『京都新聞』6・12ほか

◎合計特殊出生率 厚労省が6月2日に発表した「人口動態統計」によると、2012年の合計特殊出生率（15歳～49歳の女性が産む子どもの数。2・07が人口を維持する水準）は、1・41。団塊ジュニア世代の30歳代を中心に緩やかな回復傾向にあり、前年より0・02ポイント上回った。20歳代は減少ぎみ。過去最低は2005年の1・26。

2012年に生まれた子どもの数は103万7101人。前年より1万3705人減り、過去最少に。一方、死亡数は前年より3188人多い125万6254人にのぼった。人口の自然減は21万9158人。

WHO世界保健統計（2010年時点）によれば、国別の合計特殊出生率は、ニジェールが7・1で最多。アフリカ諸国が5～6で並ぶ。アメリカ2・1、フランス2・0、中国1・6、ドイツ・日本1・4、韓国・シンガポール1・3だった。

フランスは高齢化がゆっくり進んでおり、育児関連予算を重点的に増やすことで2・0に上昇した。人口減で将来3人にひとりが高齢者という将来予測に憂慮するよりも、人口減に歯止めをかけながら、すくえた長寿社会を形成する対策を講じるべきだろう。

（朝日新聞6・6 WHO世界保健統計2012年版 ほか）

◎なだいなだ（堀内秀 ほりうち・しげる 1929＝昭和4・6・8～2013＝平成25・6・6。83歳）

作家。精神科医、評論家。老人党提唱者。ペンネームは“nada y nada”（スペイン語。ナニモナイ ト ナニモナイ）から。前立腺ガン、膵臓ガンであることを公開していたが、6月6日死去。

1929年東京生まれ。慶応義塾大学医学部卒業。精神科医、作家。フランス留学後、東



京武蔵野病院などを経て、国立療養所久里浜病院のアルコール依存治療専門病棟に勤務。1965年、『パパのおくりもの』で作家デビュー。著書に『TN 君の伝記』『くるいきちがい考』『心の底をのぞいたら』『こころの底に見えたもの』『ふり返る勇気』などがある。（『老人党宣言』筑

摩書房の「著作者について」）

・老人党 The virtual party of the seniors 公式サイト

— 「長生きしてよかった」という社会を築くために—
— 「強い国」より「賢い国」へ—

■老人党とは？

政治の行き詰まり状態の責任の多くは、選挙で彼らを盲目的に支持してきた老人にある。だが、いつまでも馬鹿にされてはいない。老人だけでなく弱い立場にいる人はパソコンや携帯電話を武器にして情報を集めよう。考えよう。公共事業を食べ物にするような例があれば、それを公表しよう。そして次の選挙で自分たちを馬鹿にしてきた政治家にノーを突きつけよう、というのです。

■老人党の目的は？

老人党は、老人のためだけにではなく、この国を改革するために、老人たちに何が出来るか、を考える党です。老人党は、つぎのように目的を掲げます。

1. 老人を含む、いま弱い立場にいる人の暮らしやすい社会をつくる
2. 世界の平和をめざし、日本を戦争をしない国とする
3. 平和と基本的人権を保障する日本国憲法を護る
4. 政治や司法が誠実・有効に機能しているか、積極的に意見を発信する
5. 老人と未来の老人が協力して現政権に市民の声を届け、より良い社会を目指す

老人党は、作家・精神科医のなだいなだが提唱して立ち上げられた、インターネット上の仮想政党（ヴァーチャル政党）です。老人党開設のいきさつについては、なだいなだの著書『[老人党宣言](#)』（筑摩書房）に詳しいので、ご覧ください。

（「老人党」公式サイトから）

絶筆:「なだいなだ のサロン」最終更新

「打てば響く(コラム)」2013年

5月28日

最近の株の暴落。アベノミックスとやらの円安政策に騙されるものも、はじめは多いだろう。しかし、こんな人工的な手段(坊ちゃんたちの考え付きそうな)では、デフレ脱却とやらはできない、とぼくは睨んでいました。『婦人之友』にそのことを書いておきました。

株屋たちが、それははやして株価を吊り上げていましたが、もうけを得るのは、この辺が限度と考えたのでしょう。それが今度の暴落になったとぼくは見ます。

日本の株でもうけているのは日本の株屋ばかりではありません。儲けを狙う世界中の株の相場師・投機家なども、こういう機会を逃さない。かれらは、ナシヨナリズムには関係ありませんから、もうけられるのは、これが限度かなあと思えばさっさと手を引く。



そして数か月の浮いた気分も、もう終わりでしょう。日本のマスコミは昔から、どちらかというと政府寄り、アベノミックスの提灯を持ってきましたが、いまごろ、この騒ぎで一番儲けたのが相場師や投機家で、損をしたのが、これから円安の付けを、諸物価値上げの形で、払わせられる日本の庶民だと気が付いているでしょうか。

でも、株暴落が、参議院選挙の前であったことが、唯一の救いです。

一方で、アメリカに勇ましくケンカを売った維新の会の橋下が、あっけなく降参してしまったのは意外でした。次号のちくまに、少しは頑張るだろうと、見込みを書いてやったのに。ちょっとがっかりでした。維新の会の議員たちが、選挙のために、謝らせたのでしょうか。しかし、タイミングが良くない(かれらにとってです)。維新の会の勢いはもうこれで終わりでしょう。つまりかれらも終わり。

現在まで、ひたすら選挙の利害で結びついていた自民・公明の連合ですが、改憲に消極的な公明とは選挙が終わるまで付き合い、あとは維新の会とくつつこうか、とひそかに考えていた自民党の黒幕も、この維新の会の自滅は計算外だったのではないかなあ。

こうして自民の勢いが落ちてきたのに、それに付け込むことのできる野党がない。野党連合を作る知恵者がいない。つまりは、少しばかり知恵の深い政治家が野党にいないということ。本当に政治家日照りですな。

ぼくは、がんと付き合いで、なんとか頑張っていますが、白状すると、ちょっときつい。

がんの告知は、本人に、自分の残りの人生を計画させるためには都合がいい。ぼくはその恩恵を受けている。しかし、父、夫が次第に死に近づくということを知らされた近親の者たちには、この告知は、かなりな苦痛を与えている。そのことなど知ったこっちゃない、自分のことで頭はいっぱい、といていられないのが、精神科医である本人。精神科医の同僚たちよ、告知のこうした一面の研究をしてくれないだろうか。それがぼくの今の気持ちだ。